

1. はじめに

五頭連峰の山頂にうっすら雪が積もり、肌寒い季節になってきました。発掘調査を進めるなかで、外輪橋遺跡の様子が少しずつ明らかになってきました（第1・2図）。

新たに発見したことを、今月も発掘調査だよりを通してお伝えいたします。



第1図 B区の調査のようす



第2図 C区の調査のようす

2. B・C区の調査の状況

【B区】 礎板を発見！！

調査区の東側に遺構が集中しており、第3図のような木の板が見つかりました。板は、等間隔に3枚並んでいます。実は、これは軟弱な地盤に建物を建てる際、柱が沈んで建物全体が傾かないようにするために柱の下に敷く「礎板（そばん）」と呼ばれるものです（第3図）。

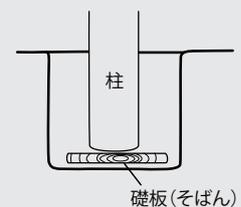
柱穴の底にある礎板が、現代の耕作土を取り除いた面から発見されたことから、B区では遺跡上部の大部分が削られていることがわかりました。

【C区】 ①たくさんの柱穴を発見！！

調査区の東側に、柱穴が集中していることがわかりました（第4図）。柱穴は、一定の間隔で並んでいるものもあります。

柱穴の中の土を観察したところ、柱の痕跡が残っており、B区で見つかった柱穴よりも深いことがわかりました。

今後は、柱の対応関係を検討して、建物のかたちを明らかにしていきたいと考えています。



第3図 発見された礎板とイメージ図

小澤太郎「(講義録) 古代の日本建築はどう変わったか」を改編



第4図 発見されたたくさんの柱穴（C区）

②川跡から橋脚を発見！！

調査区の西側に位置する川跡から、むかしの橋脚（きょうきやく）部分が見つかりました。

第5図の矢印に示したとおり、2.5mの幅で3列に、木杭が規則的に並んでいます。木杭は、先端を尖らせるために削った痕跡、木を組み合わせる際に開けた穴など、人の手によって加工された痕跡が見られます。

今後、橋が使われていた時期や、橋脚にはどのような種類の樹木が用いられているのかなど、明らかにしていきたいと思います。



第5図 川跡から発見されたむかしの橋脚（C区）

③見つかった墨書土器！！

川の底から、須恵器に墨（すみ）で文字が書かれた「墨書土器（ぼくしょどき）」が発見されました。

第6図の墨書土器は、須恵器の表面に「十」の文字が書かれています。

「十」の文字が書かれた墨書土器は、笹神地区にある発久（ほっきゅう）遺跡（発久地内）や腰廻（こしまわり）遺跡（山倉地内）でも見つかっています。どのような意味があるのでしょうか？



第6図 墨書土器が発見されたようす（C区）